高校演劇発表大会における高校生の変化成長について
～生徒講評委員会の活動をふりかえって～

○中島　憲　（北海道大学教育学院博士後期課程）

1.生徒講評委員会活動になぜ注目するか

授業で高校生に発問すると正解を探して押し黙る。出来る事なら黙っていて、諦めて欲しそうでもある。「わかりません」といえない発問でもそれほど違いはない。生徒同士で議論をさせても3人ではある程度成立するが、4人以上になると1人以上は黙ってみている。6人を超えると全体が黙ってしまう。話し合いを含めた授業風景で良く観られる現象である。

高校演劇発表大会で行われている生徒講評委員会は10人を超えるが活発に議論を進める姿がみられる。なぜこの討議が成立するのか。それは、演劇創造に関する知識の確認と集団を意識したアイスブレーキングにあると考えて居る。議論のベースを造った上で、生徒達が観劇した後に集団討議を行う。初めは戸惑っているが,やがてしっかりした議論ができるようになる。この活動を終えたあと、生徒達の中にはより良い作品を創造する意欲を持ち、結果も出す者が現れる。アイスブレーキングと技術的背景の指導の連動によりグループ討議の自信と方法を身につけることが可能となる。この事前指導と導入に新しい学びの方法があるのではないかと考える。

2.生徒講評委員会

高校演劇の全国大会は全国2,100校の代表として全国8ブロックから推薦された上演校12校[*1]のコンクール形式による演劇舞台上演と15名による生徒講評委員会の2部門で構成される。2003年鯖江市で行われた全国高等学校演劇発表大会で初めて全国大会での試行が行われた。筆者は鯖江大会で生徒講評委員会を指導していた福井県勝山南高校の川村信治氏と共に全国大会生徒講評委員会原則を制定した。その後、2005年八戸大会から継続的に取り組んでいる。その成果を高く評価したブロック、県の下位大会でも広く生徒講評活動が取り入れらつつある。

「演劇を成立させる要素は、演じ手と観客の二つである。講評委員会は観客の立場から、上演を真摯に受け止め、学ぶ立場から講評を行う。それを集団で行うことにより、集団講評を実現する。 それらの成果を、講評文にまとめて上演者との討論により、上演者との学び合いの契機をつくる。また、講評文の発行を通じて観客への発信の場とする」（生徒講評委員会原則 2007.4）

生徒講評委員会はアイスブレーキングから始まる。アクティビティが生徒間の距離を一気に縮める。続いて舞台用語や舞台の約束を確認して、上演ビデオを観て講評の練習を行う。これらの事前指導が半日から2日かけて行われる。

生徒講評委員会では以下の条件で舞台を「高校生として」どう受け止めるのかを最も重視している。舞台観劇後に、次の上演までの20分ほどで全員が発言する。観点は以下の4点。

・舞台上の表現を素直に受け止めること　　**・否定から始まる見方をしない**

・自分と対比して観ることが出来る　　**・スタッフの明らかな失敗は責めない**

---

*1　北海道・東北・関東・中部日本・近畿・四国・中国・九州。関東が2校＋開催県＋ﾛｰﾃｰｼｮﾝ1の12校である。

3. 生徒講評委員会の効果

この取り組みによる変化成長の中で、アンケートや聞き取りで確認できた点は以下の通り。

a. 参加生徒

高校生が演劇を観て「リアル」を感じることが重要である・自分たちが発信する舞台も観客に伝えることが重要である・伝わらない表現は意味が無い・演劇創造活動への大きな意欲喚起

b. 顧問

自分たちが観ている視点と高校生の視点との差異・生徒自身が見つけ出す議論観点の鋭さ・教育とは待つことであることを見直す・演劇に対する意識意欲の深化・教育の原点と本質の見直し

生徒講評委員会を開始して以来、参加校が直後の上位大会に進むことが頻発した。全国大会にまで進んできた学校もあった。生徒・顧問が刺激を受け、意欲的に創作活動に取り組んだ結果だと考える。また、この経験によって積極的に発言できるようになったという実感を持つ卒業生も多い。生徒講評委員活動の方法に大きな教育的効果があるのではないかと考え、10年を超えた現在その検証に取り組みはじめたところである。

4. 考察の要旨

今の生徒達は膨大な情報量の中、「孤立」している。情報ネットを介した接触はするが、対面でのコミュニケーションは極度の緊張を伴う。集団生活の場である学校で、緊張し、いつも疲れた状態にある。この状態の中で、自由に意見交換をすることはほぼ不可能である。曖昧で当たり障りの無い意見が出てくる。生徒達は、多元化した顔を持ち、相手に併せて生活している。一部の動画配信のみ活発だが、SNSでさえも表現は記号化して年々減少しつつある。情報発信に対する否定的反応を恐れているようでもある。

生徒講評委員会の導入では初対面の緊張を取り去るために行う、集団内のパーソナルエリアを意識させ、対話を行うためのアクティビティが有効に作用する。さらに演劇を志している同志としての意識の共有と、彼らにとっては新しい視点である観客の視点を獲得する。その結果、安心して発言できる場が与えられる。

この取り組みで生徒達は「観客の視点」を獲得する。それは、「上演だけ(自分だけの視点)を目的とする」のではなく、「どのように観客の(相手の)心を動かせるのかをまず考える」視点を獲得するのである。これは、日常生活の中で、「他人がどのように自分を観ているのかを考えながら行動する」「他人を慮って行動する」「他人の意見を建設的に受け入れる」こと、すなわち、「集団の中の自己」と「他者の認識」と理解に直結する。

観劇直後に感じたことを短時間で言葉にすることで成長していくこの取り組みの中で、議論は次第に深まっていく。観察者(大人)も驚くような視点が飛び出すことも多い。戦争体験や親の感情など「未体験の感覚」に対する想像の共有も自然に生まれる。また、取り組みの中でお互いの疑問をどう受け取るのか、また、わからないことをわからないと発言できる状況も生まれる。表現に正解・不正解はないのだと言うことを理解するのである。このように初対面の高校生達がグループで討議を行うことが、「グループによる課題解決による学び」へ発展する事もしばしば起こるこの取り組みから、新しい学びの形を考えることができるのではないかと考えている。